

福岡翔学館だより

2016.1.22 発行

行事予定

- 1月 20日(水)～22日(金) 後期試験(卒業生)
29日(金) 総合レポート締切(1・2年生)
2月 8日(月) 9日(火) 10日(水) 後期試験
2月 24日(水) レポート最終締切



↑1/5 今年も毎年恒例の三社参りウォークを行いました。博多から、十日恵比寿神社→筥崎宮→櫛田神社の約10kmのウォーキングでウォームアップでき、今年も1年がんばろう！という始動にもなったように思いました^^

※写真はおみくじを引いている様子です。

※※レポート締切のお知らせ※※

後期のレポート・総合的学習レポートは1月29日(金)が締切となっています。

なお、2月24日(水)が全レポートの最終締切となっておりますので、これ以降の提出になると今期の単位取得はできなくなります。ご注意ください。

新しい年(平成28年)を迎えて思う事は、本年も健康第一で生徒たちと一緒に有意義な一年を送りたいと願う事です。

各々にとって「有意義」な一年の比較はできませんが、それぞれの価値観を持ち、そして、その価値観を広め、深め、高める事が大事だと認識しています。

私達は、そのサポートが出来る事が、楽しくて楽しくて仕方ありません。そのためには、私達が精神的にも身体的にも健康でいなければと、常々心がけております。日々の暮らしの中で食事・睡眠など生活の基本となる事にも改めて意識し、大切にすることで、生徒たちそれぞれが望む、次のステップに向けて歩み出す一年になることを願い、新年の挨拶とさせていただきます。

川原 秀之

1/10 八女・山村塾にて行われた左義長にIくんと参加してきました。

事前準備に参加するために前日お昼からバスで黒木町まで行き、宿泊先の四季菜館まで40分ほど、あれこれ話したり、肉まんを食べたりしながら歩きました。

この日は、作業服に着替えて、竹を移動したり、竹の中に稲わらを詰めた竹灯籠を棚田の畝に置く作業をしました。そして日の入りとともに点灯させるお手伝いもすることができました。竹灯籠を見ながらの夕食は最高でした。

10日(当日)は前日の竹灯籠を回収し、竹などを使って左義長のやぐらを組み立てる事にも携わることができました。とても貴重な経験をすることができました。



この二日間で、野菜を中心とした美味しい食事を楽しむことができたし、地元の方々とのコミュニケーションだけでなく、生徒とも長い時間を共有する中で普段話せない話をたくさんすることができ、より心を開いて近くなる事ができました。Iくんは、とても楽しんでいた様子で帰宅してからもそのことについて仕切りに話をしていたと後日、家の方が話してくれました。今度は家族で参加してみる予定だそうです^^

今の日常生活を離れ、豊かな自然や食、人々と接する体験はとても有意義でした。農村体験などに興味のある方はぜひご相談ください。

不登校に思う（その2）

平成27年12月末に「不登校に思うーその1ー」を皆さまにお届けしましたら、A君のお母さんから、次のような言葉をいただきました。

「先生の書いておられる通り子どもが不登校になった時、まさかうちの子がと思い、どうしても受け入れることができませんでした。私達、親は子どもの将来を思って、よかれかしと思い、子どもを育ててきました。時にはきついことも言いました。しかし、子どもは不登校になりました。子どもが不登校になった時、私達はなんとかしなければと大変あわてました。私達は『不登校』ということ認めることができませんでした。

今思うと、その根底には『不登校は悪い』という価値観がまずあったのです。そして、子どもが思っていることや、苦しんでいることを知ろうとしていませんでした。一方的に親の言い分を押し付けていたのですね…」と。

私も2人の子どもの親として、子育て中は悩みも多く、これでいいのかという思いを繰り返す毎日でした。このように悩んでいる時にアメリカの小児医学心理学者のブラゼルトン博士の言葉に出会い考え方が変わりました。その言葉は次のようなことです。

「一人ひとりの子どもは生まれながらにして、はっきりした個性を持っており、また親や、保育者もそれぞれ独特な個性を持ち、この両方の間に展開される独特なドラマが育児であり、保育である。そして、せっかちな親はのんびりした子どもが気になり、神経質な親はおおらかな子どもが気になるように、その「相性」^{あいしょう}によって問題が大きくなったり、小さくなったりするのです……」というのです。この考え方に出会ってから、私は少し荷が軽くなり、何とかなるだろうという思いから、心にゆとりをもって子育てにあたるようになりました。

不登校の子ども達と接していると、親子関係、友人関係で悩んでいるのだなあということが、よくわかります。それにじっくり耳を傾ける事です。今回も子ども達の声を少し書いてみたいと思います。

- ・ 父親が僕に向かって「どこの高校に行きたいのか。本気で高校に行く気はあるのか。偏差値は大丈夫か」
日頃は全く目を向けないのに何で急に、このようなことを言うのか。
- ・ 親が自分ではどうすることもできないおれを他人(病院)に連れて行った。おれは親に認めて欲しかっただけなのに。
- ・ 家族でゆっくり、笑いながら食事をする時がなかった。小学校の6年生の時は、週4日も塾に行かされた。日曜日は時々塾の試験があった。夕ごはんはコンビニの弁当を塾で食べていた。さみしかった。家族で食べたかった。
- ・ 逃げないで、本気になっておれと話してくれた父親に救われた。
- ・ がみがみと言っていた親が、どこで勉強したのか、急にがみがみ言わなくなった。
その分こちらから親に近づいていった。

このように子ども達はいろいろな思いを持って、親子、友人関係の中で育っていくものです。私達はこのように悩んでいる子ども達を『ホッと』させてやりたいのです。そのためには、言葉が少し厳しくてすみませんが、「親が変わること」です。親が子どもの状況(現状)を正面から全面的に受け入れ、子どもに寄り添うことです。そして理解することです。そのための一助になればと翔学館では川原先生方が全力で子ども達にかかわっています。私も少しでも手助けになればと相談に応じています。

牛島 達郎

